



Title	『聖アントワーンの誘惑』におけるバラモンとブッダ
Author(s)	金崎, 春幸
Citation	Gallia. 2018, 57, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69849
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『聖アントワヌの誘惑』におけるバラモンとブッダ

金崎 春幸

1846年の春、「オリエントの物語」を構想していたフローベールは、オリエント関係の文献を読んでいく中で、インドの宗教書に出会う。4月7日のマキシム・デュ・カン宛の書簡には、「僕はバラモンになる、というよりもちょっと気違いになるのだ。冗談ではなしにバラモンに生まれたかった。君に『バガヴァド・ギーター』の断片を見せよう。そうしたら僕の羨望が分かるよ」とあり¹⁾、バラモンに対する熱狂がうかがえる。一方、翌5月の同じデュ・カン宛の書簡では、ウージェーヌ・ピュルヌフの『インド仏教史序説』の一節を引用して、「シャカムニは『苦しみが愛着から生じることを理解した者は犀のように孤独の中に引きこもる』と言っている」と書いていて、ブッダの言葉に深い共感を示している²⁾。4月から5月にかけてフローベールの関心がバラモンからブッダに移ったようにみえるが、「バラモン」を祭司階級としてではなく、インドの孤独な修行者として考えると、この二つの手紙はほとんど同じものに熱をあげたことが分かる。クロワッセの隠者たるフローベールにとって、インドの隠者はあこがれの対象であり、バラモンになりたい、ブッダのごとくありたいと願ったとしても不思議ではない。

1846年の夏以降、「オリエントの物語」のプランづくりが進まなくなると、フローベールの関心は『聖アントワヌの誘惑』の作成の準備へと移行していき、インドの宗教に関する知識も、この作品の中に組み込まれていく。本稿では、『聖アントワヌの誘惑』の草稿、特に読書ノートやプランを探りながら、フローベールのバラモンとブッダに対する考え方を探っていく³⁾。

-
- 1) «Je deviens brahme ou plutôt je deviens un peu fou. C'est sans rire : je voudrais être né brahme, je te montrerai des fragments du *Bhagavad Gita* et tu comprendras mon envie» (Flaubert, *Correspondance*, Tome I, Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, p. 263). (以下、プレイアード版のフローベール書簡集から引用する際は、*Corr.* と略記し、巻数と頁数を記す。)なお、「バラモン」(サンスクリット語では «brāhmaṇa»)を意味する語としてはふつう «brahmane» が用いられるし、フローベールも読書ノートでは «brahmane» と書いているのだが、この手紙では例外的に «brahme» を使っている。
 - 2) «Celui, dit Çakya-Mouni, qui a compris que la douleur vient de l'attachement se retire dans la solitude comme le rhinocéros» (*Corr.*, I, p. 265).
 - 3) 『聖アントワヌの誘惑』第1稿についてはジャン・セズネックによる起源研究がある (Jean Seznec, *Les Sources de l'épisode des dieux dans La Tentation de saint Antoine (Première version, 1849)*, Paris, Vrin, 1940)。しかし、セズネックは『バガヴァド・プラーナ』など、フローベールが参照したと確認できない文献も挙げており (*ibid.*, p. 54)、本稿では読書ノートを元に、より厳密に検証している。

『聖アントワーンの誘惑』第1稿における隠者

『聖アントワーンの誘惑』第1稿は1848年9月に書き始められているが、執筆開始前につくられた読書ノートの中に「インド」と題された6頁にわたるノートがある⁴⁾。その5頁目の冒頭には「バラモンの理想」という表題がついていて、また同じ頁の中ほどに「ブッダ」という表題がある⁵⁾。「バラモンの理想」に関するノートは19行にわたっており、最初の6行は『マヌ法典』から取られている⁶⁾。

Idéal du brahmane

devient pur en se détach[ant] de toutes les affect[i]ons mondaines.

[...]

- qu'il contemple l'éther subtil dans les cavités de son corps, l'air dans son act[i]on musculaire, la lum[i]ère du soleil dans sa chal[eur] digestive, l'eau dans les fluides de son corps, la terre dans ses membres, la lune dans son cœur, Vichnou dans sa marche, Agni dans sa parole, Mitra dans sa faculté excrétoire⁷⁾.

表題に続く行は、『マヌ法典』第5章108条でバラモンは「この世のあらゆる愛情から離れることによって純粋になる」をそのままなぞったものである⁸⁾。次の段落は同書第12章120-121条で、「微細なエーテルを体の穴で凝視すべし」など、バラモンが至福に達するための秘儀が語られる箇所から取られている⁹⁾。『マヌ法典』は近代的な意味での法典ではなく、神話、宗教、生活習慣などあらゆる領域において、バラモンやクシャトリヤやヴァイシャの人々が守るべき規律、知るべき知識を体系化したものであるが、フローベールはバラモンが死後も至福を得るためになすべき行為のみに焦点をあててノートをとっている。

『マヌ法典』からの引用の後、読書ノートは『バガヴァド・ギーター』、ジュール

4) Bibliothèque nationale de France, Nouvelles acquisitions françaises (以下、N.a.fr.と略記) 23671, f° 179, f° 179v°, f° 181, f° 181v°, f° 180, f° 180v°.

5) 「ブッダ」についてのノート等、仏教に関わる事柄については、以下の拙論参照：「フローベールと仏教」、『言語文化研究』第41号、大阪大学大学院言語文化研究科、2015年3月、47-64頁。

6) 当該の頁には元の文献については何も記載されていないが、1846年頃のフローベールの書簡を手掛かりにして、当時読み得たインド関係の文献と照合すれば、出典を見出すことができる。『マヌ法典』を読んだことは、1846年9月15日のエマニュエル・ヴァス・ドゥ・サントゥアン宛書簡で分かる (Corr., I, p. 344)。

7) N.a.fr. 23671, f° 180. 草稿を引用する際にはできるだけ元の状態を再現している。ただ、読書ノートにはメモ風に、語を途中までしか書いていない箇所が多く、そのような場合は[]で補っている。

8) «[...] un Brâhmane devient pur en se détachant de toutes les affections mondaines» (*Lois de Manou*, traduites du sanscrit et accompagnées de notes explicatives par Auguste Loiseleur-Deslongchamps, Paris, Chapelet, 1833, p. 184). 『マヌ法典』は1794年にウィリアム・ジョーンズによって英語に訳されているが、フローベールは明らかにロワズルール・デロンシャンの仏語訳をそのまま写し取っている。

9) «Que le Brâhmane contemple [...] l'éther subtil dans les cavités de son corps ; l'air, dans son action musculaire et dans les nerfs du toucher ; la suprême lumière *du feu et du soleil*, dans sa chaleur digestive et dans ses organes visuels ; l'eau, dans les fluides de son corps ; la terre, dans ses membres ; la lune (Indou), dans son cœur ; [...] Vichnou, dans sa marche ; [...] ; Agni, dans sa parole ; Mitra, dans sa faculté excrétoire» (*ibid.*, pp. 457-458).

ヌフの『インド仏教史序説』、『シャクンタラー』の抜粋が組み合わさったものとなる。

[...] faire pass[er] l'haleine par les narines

- bras levés au-d[essus] de leur tête pend[ant] toute leur vie - brasiers -

les yeux fixant le soleil, corps à moitié plongé dans un monticule de sable - au lieu du cordon une peau de serpent, pour collier les branch[es] entrelacées d'arbriss[eaux] épineux - les chev[eux] en partie flott[ant] sur ses épaules, en partie relevés en faisceau sur le sommet de sa tête les oiseaux y constr[uisent] leur nid com[me] dans un arbre touffu.

[...]

de l'attachement naît la douleur. celui qui a reconnu que la douleur provient de l'attachement se retire comme le rhinocéros dans la solitude.

引用の1行目は『バガヴァド・ギーター』第5章27で、「息を鼻孔から通す」ことなどによって解脱に至ることをクリシュナ神が勇士アルジュナに語る箇所から取られている¹⁰⁾。次の行間の挿入は、ビュルヌフの『インド仏教史序説』にある、苦行に身を任せるバラモンの中には「一生の間、頭の上に両腕を挙げたままに」している者や、四つの「熾火」の真ん中で座っている者がいるという一節から来ている¹¹⁾。次の段落は、『シャクンタラー』第7幕で¹²⁾、天界の庵で苦行する仙人マリーチャが身動きもせず「太陽を見据え、砂塚に半ば身を沈め、紐の代わりに蛇の皮をもち」、棘のある枝で首を締め、頭や肩に鳥の巣ができていた姿を描いた箇所から引かれている¹³⁾。そして引用の最後には、1846年5月の書簡(注2)にも

10) «[...] who maketh the breath to pass through both his nostrils alike in expiration and in inspiration» (*The Bhāgvat-Gēētā*, Translated from the original in the Sānskrēt by Charles Wilkins, London, C. Nourse, 1785, p. 60). 『バガヴァド・ギーター』のどの訳をフローベールが参照したかを判断するのは容易ではない。セズネック (Seznec, *op. cit.*, p. 41) は、シュレーゲルによるラテン語訳を読んだ可能性が高いとしている: *Bhagavad-Gita, id est ΘΕΣΠΙΕΣΙΟΝ ΜΕΛΟΣ*, Textum recensuit, adnotationes criticas et interpretationem latinam adiecit Augustus Guilelmus A. Schlegel, Prostat Bonnae apud Eduardum Weber, 1823. しかし、読書ノートには、元のサンスクリット語の«Muni»を英語式に«Moonee」と表記した箇所があり (N.a.fr. 23671, f° 181)、1848年の時点ではウィルキンスによる英語訳を参照したことが分かる (シュレーゲルは«anachoreta」と訳している)。フローベールは1846年4月7日の書簡 (本稿注1) では本の題名を *Bhagavad-Gita* と書いているので、おそらく1846年の時点ではラテン語訳を読み、『聖アントワヌの誘惑』第1稿のための読書ノートでは英語訳を用いたのであろうと思われる。仏語訳は、1787年のParraudによる訳、1832年のLanjuinaisによる訳と二種類出ているが、いずれもフランス語の表現が読書ノートと異なっている。

11) «[...] les autres tenant, pendant toute leur vie, les bras levés au-dessus de leur tête ; quelques-uns assis [...] au milieu de quatre brasiers ardents» (Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du buddhisme indien*, Paris, Imprimerie royale, 1844, pp. 138-139).

12) 『シャクンタラー』はカーリダーサ作の戯曲。フローベールはこの作品を1846年9月14日に読み終えて、「l'Inde m'éblouit」とルイーズ・コレに書き送っている (*Corr.*, I, p. 342)。

13) «Là où vous apercevez ce pieux solitaire, fixant, dans une immobilité parfaite, le disque radieux du soleil ; le corps déjà à moitié plongé dans un monticule de sable [...] ; portant, au lieu du cordon brâhmanique, la peau hideuse d'un énorme serpent ; pour collier, les branches

あったビュルヌフの著作の一節がほぼそのまま写し取られている¹⁴⁾。

読書ノートを作成した後、フローベールは神々の場面全体のセナリオ、個々の神のプランをつくる。クリシュナ神に関するプランは次のようになっている。

Crichna. [...]

idéal du Brah[mane] - qui s'élève
remplace
jusqu'à Dieu & le dépasse
entrant dans l'idée. le devenant
lui-même - état buddhique prédit¹⁵⁾ -

クリシュナの語る言葉の中に「バラモンの理想」が入っており、ここに上記のノートの内容が入ることが示されている。クリシュナの言葉の中でバラモンの理想が言及されるのは、『バガヴァド・ギター』でクリシュナがアルジュナに神（ブラフマン）を信ずる者のあり方を説いて聞かせる設定を借りたものであると思われる。その後の「彼は神にまで昇る」という箇所もやはり『バガヴァド・ギター』でクリシュナの語る神との一体化を示唆したものだと考えられるが、次の「神に取って代わる…」になると、これはバラモン教やヒンドゥー教では瀆神行為となる。最後の「ブッダのような状態が予言される」では、完全にバラモンの理想を超えて、ほとんどブッダの境地にまで近づくことになってしまう。

この不思議なプランは清書原稿ではどうなるのか¹⁶⁾。プレイアード版のテキストで見ていこう。

UN DIEU NOIR [...].

[...]

Au milieu de la forêt le Religieux qui regarde le soleil prie de toute son âme, il contemple l'éther subtil dans les cavités de son corps, la chaleur vitale dans son estomac, l'humidité dans ses fluides, la terre dans ses membres, la lune dans son cœur ; méditant sur les choses, il fait passer son haleine par ses narines ; il n'agit point ; il est saint vraiment, le dévot ascétique qui porte un collier d'épines,

entrelacées d'arbrisseaux épineux [...], et recélant, parmi ses cheveux relevés en partie en un énorme faisceau, sur le sommet de sa tête, et flottant en partie sur ses larges épaules, une foule d'oiseaux, qui, pleins de confiance, y ont construit leurs nids comme dans un arbre touffu » (*La Reconnaissance de Sacountala*, drame sanscrit et prcrit de Calidasa, accompagné d'une traduction française, de notes philologiques, critiques et littéraires, et suivi d'un appendice par Antoine-Léonard Chézy, Paris, Dondey-Dupré, 1830, p. 163). フローベールがシェジーによる仏語訳を参照していることは、同じ読書ノートにシェジーによる注釈 (*ibid*, p. 213, note 48) から引用した箇所があることで容易に分かる。

14) «De la recherche naît l'attachement, de l'attachement naît en ce monde la douleur : que celui qui a reconnu que la douleur provient de l'attachement, se retire, comme le rhinocéros dans la solitude» (Burnouf, *op. cit.*, p. 94).

15) N.a.fr. 23671, f° 185.

16) 下書き原稿は1頁のみ : N.a.fr. 23671, f° 185. 清書原稿は N.a.fr. 23664, f° 448.

qui reste entre quatre brasiers, et qui est si immobile que les oiseaux sont venus faire leur nid dans sa chevelure comme dans un arbre touffu.

Il est bien fort ! il s'est retiré du monde, il se retire de lui-même, il se dégage, il s'élève et graduellement gagne la perfection [...] ; il médite si profondément que sa pensée le transporte où il veut : il voit à toute distance, il entend tous les sons, prend toutes les formes¹⁷⁾...

「黒い神」とは言うまでもなくクリシュナである¹⁸⁾。クリシュナはインドの神々の列の最後に登場し、一人称で子供時代の話をした後、突然三人称で森の中の「le Religieux」について語り始める。初めの段落はほとんど「バラモンの理想」の読書ノートの記載事項の順番を変えただけである。1行目の「太陽を見つめる」と最後の「鳥たちが茂った木であるかのように彼の頭に巣をつくっている」は『シャクンター』の仙人マーリーチャの姿であり、その間に『マヌ法典』の「微細なエーテルを体の穴で凝視する…」、『バガヴァド・ギーター』のクリシュナの言葉「息を鼻孔から通す」、『シャクンター』の仙人の「棘のある首輪」、『インド仏教史序説』の「熾火」が置かれている。

次の段落の「彼はこの世から引きこもっている…」は、『マヌ法典』の「バラモンはこの世のあらゆる愛情から離れることによって純粹になる」と『インド仏教史序説』におけるブッダの言葉「孤独の中に引きこもる」を融合させたものであろう。後半の「彼は非常に深く瞑想にふけるので…」は、「バラモンの理想」のノートからではなく、同じ頁の下の方にある「ブッダ」のノートに記された「強い瞑想の結果、人間は別の場所に運ばれる¹⁹⁾」と「そのとき聖者は極限の能力に達し、自分の望むかたちになることができ、あらゆる音が聞こえ、どれほど離れたものでも見える²⁰⁾」をつなぎあわせたものである。これらはすべて『インド仏教史序説』から取られたものであり、ブリュヌフによれば、ブッダの教えを信じる者は4つの段階を経て徐々に完全さに至り、その最後の段階ではさまざまな超能力、

17) Flaubert, *Œuvres complètes*, Tome II : 1845-1851, Édition publiée sous la direction de Claudine Gothot-Mersch, avec, pour ce volume, la collaboration de Stéphanie Dord-Crouslé, Yvan Leclerc, Guy Sagnes et Gisèle Séginger, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2013, pp. 535-536.

18) ブレイアード版の注で、ジゼル・セジャンジェは黒い神がシヴァであるとし、「シヴァ派の苦行者はヨーガを実践し、息を抑制しようと努める」と書いているが (*ibid*, p. 1452, notes 50 & 52)、黒い神が語る言葉のために準備された読書ノートやプランの中に、シヴァ神に関わるものは見当たらない。

19) « Méditations si intenses qu'elles transportent l'h[omme] d'un lieu à un autre » (N.a.fr. 23671, f° 180). 元の『インド仏教史序説』では、瞑想により運ばれるのは人間ではなく、「Bhagavat」つまりブッダである：« Alors Bhagavat entra dans une méditation telle, qu'aussitôt que son esprit s'y fut livré, il disparut de la place où il était assis, et que s'élançant dans l'air du côté de l'occident, il y parut [...] » (Burnouf, *op. cit.*, p. 183).

20) « Alors le saint arrive à des facultés extrêmes, peut prend[re] la for[me] qu'il veut - [...] entend tous les sons - voit à toute distance » (N.a.fr. 23671, f° 180). 『インド仏教史序説』では、「L'Arhat ou le Vénérable est [...] parvenu au degré le plus élevé parmi les Religieux ; et les Sâtras ainsi que les Avadânas lui attribuent des facultés surnaturelles, [...] qui sont : le pouvoir de prendre la forme qu'on désire, la faculté d'entendre tous les sons [...], enfin la faculté de voir les objets à quelque distance que ce soit » (Burnouf, *op. cit.*, pp. 294-295).

すなわち自分の欲するかちになる能力、あらゆる音を聞く能力、どれほど離れたものでも見える能力などを得るとされている。

このように読書ノートと照合しながらクリシュナの言葉を見ていくと、森の中の「le Religieux」は初めの段落では苦行するバラモンであったのに、引用の最後では仏教の修行者のように描かれていることが分かる。つまり「バラモンの理想」を目指し苦行を重ねていた者が、プランにあった「état buddhique」に到達しようとしているのである。「le Religieux」という表現は『インド仏教史序説』で頻繁に見られるものであり、バラモンの修行者としても仏教の修行者としても使われている²¹⁾。フローベールはこの用語法を利用して、バラモンの苦行者がブッダのような超能力をもつに至るという、独特な隠者像をつくりあげたのである。

「le Religieux」にフローベールが神的な能力を付与したのは、この隠者を神々や神的存在の列の中に組み込もうとしたためだと思われる。悪魔はあらゆる神々がほとんど死んだ状態であることをアントワヌに示すことによって、キリスト教の神も死に絶えるのだと説得しようとしている。その過程で、隠者は単に苦行するだけでなく、神的な能力をもつようになることもクリシュナの口から語らせる必要があったのだろう。フローベールはバラモン教と仏教の区別をわきまえながら、「神」ではなく「ブッダ」のような超能力を忍び込ませたのである。

森の隠者は1856年の第2稿でも第1稿と同じ設定なのだが、1874年に刊行される第3稿では神々の列から外れて、裸形仙人として登場する。

『聖アントワヌの誘惑』第3稿における裸形仙人

フローベールは第3稿の準備のために一年ほどかけて読書ノートやプランをつくり、ようやく1870年7月に執筆を開始する。執筆前のプランでは全体が9部構成で、その第4部で「le Gymnosophe」がインドの森の中でアントワヌの前に現れる。

この新たな場面のための読書ノートが、パリ市歴史図書館に保存された手帳の中にある²²⁾。Carnet 16 bisの5頁のノートは、ほとんどがヨハン・ヤコブ・ボヒンゲルの『バラモン教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒における瞑想、苦行、修行の生活』から取られたものである²³⁾。苦行に関する2つのノートを見てみよう。

21) «le corps des Religieux bouddhistes» (p. 57), «les Religieux brâhmaniques» (p. 158) など、『インド仏教史序説』全体で300例以上ある。ただし、この本の中でブッダ(シャカムニ)が「le Religieux」と呼ばれることはない。

22) Bibliothèque Historique de la Ville de Paris, Carnet 16 bis, f° 34^v, f° 34, f° 33^v, f° 33, f° 32^v. 最初のf° 34^vに«Vie monastique des Indous. Boehinger.»という出典が明記されている。

23) Johann Jacob Boehinger, *La vie contemplative, ascétique et monastique chez les Indous et chez les peuples bouddhistes*, Strasbourg, L. G. Levrault, 1831. 題名の«les Indous」にはバラモン教徒、ヒンドゥー教徒の両方が含まれている。

- se brûler vif -	il travaillera à faire
Sarmanochagas	rentrer ses sens dans son
(=Sramanatcharya)	âme, & son âme dans
se brûla à Athènes	l'Être suprême & universel
& Calanus= ^{sous Auguste} (Kalyana)	qui est Dieu ²⁴⁾ .
à Pasargada devant	
l'armée d'Alexandre.	

左側のノートは、「生きたままわが身を焼く」ことはバラモンの苦行の中でもごくありふれたものであり、ギリシアの歴史家によれば、「サルマノカガスはアテネで、カラヌスはパサルガダでアレクサンドロスの兵士たちを前にして自らの身を焼いた」というボヒンゲルの記述から来ている²⁵⁾。右側のノートは、バラモンの苦行者は「自分の感覚を魂に、魂を普遍的な至高の存在つまり神に戻させようとする」というボヒンゲルの文章を写し取ったものである²⁶⁾。後者の文は、前者の焼身自殺の話とは直接関係なく、森の中の隠者が厳しい苦行の末に食べ物もとらず、感覚がなくなり、魂を神のもとに帰そうとすることを説明したものである。しかし、二つのノートを重ね合わせると、森に棲む隠者が、究極の苦行として、自ら炎の中に身を投げ、魂を至高の存在たる神のもとに帰そうとする姿が浮かび上がる。

一方、フランス国立図書館に保存された『聖アントワヌの誘惑』下書きの草稿群の中に3頁から成る読書ノートがある²⁷⁾。3つの頁の右上にはA, B, Cとフローベール自身によって記号がふられており、Aの頁の冒頭には«Le Brahmane (Manou)»と書かれ、表題の通り、フランス語訳の『マヌ法典』から取られたノートがある。Bの頁の冒頭には«Brahmane»と一旦書かれ、それに抹消線が引かれて、上に«Buddhiste»と記されている。記述はすべてブリュヌフの『インド仏教史序説』から取られたものであり、それがCの頁にまで続き、Cの頁の途中から、『マヌ法典』からの抜粋となる。『マヌ法典』も『インド仏教史序説』も第1稿の準備のためにノートをつけたのだが、フローベールは両書を読み直して、さらに詳細なノートを作成したのである。各頁から1箇所づつ引用してみよう。

Ainsi l'homme qui reconnaît dans sa propre âme l'Âme suprême. (125). à la

24) 左側は Carnet 16 bis, f° 33^v、右側は ibid. f° 33。

25) «Une de ces pénitences les plus usitées dans les temps anciens était de se brûler vif. [...] Les auteurs grecs rapportent aussi que *Sarmanochagas* (Sramanatcharya) se brûla à Athènes, et *Calanus* (Kalyana) à Pasargada, en présence de l'armée d'Alexandre.» (Bochinger, *op. cit.*, pp. 30-31). ボヒンゲルはこの記述の典拠としてディオドーロス『歴史叢書』第17巻を挙げているが (*ibid.*, p. 31, note 2)、バラモンの焼身自殺についてはストラポーン『地誌』第15巻で詳述されており、アウグストゥスへの言及もある。Carnet 16 bis, f° 33^vの4行目と5行目の間に«sous Auguste」とあるのはストラポーンを踏まえたものと思われる。

26) «[...] il travaillera à faire rentrer ses sens dans son âme, et son âme dans l'Être suprême et universel, qui est Dieu» (Bochinger, *op. cit.*, p. 107).

27) N.a.fr. 23668, f° 150^v; N.a.fr. 23670, f° 7; Ibid., f° 15. 3つの頁には全体にわたって抹消線が入っている。これは、3つの頁が最初は読書ノートとして作成され、裸形仙人の場面が執筆されるときに (1871年5月)、下書きの第1段階として使用されたことを示している。

fin absorbé par Brahma²⁸⁾.

[Çākya a substitué l'anéantissement ou le vide au Brahma unique dans la substance de laquelle ses adversaires faisaient rentrer le monde et l'homme.]²⁹⁾

nirvāna La pensée ne paraît qu'avec la sensation & ne lui survit pas.

[...]

L'esprit ne peut se saisir de lui-même³⁰⁾.

最初の A の頁のノートは、『マヌ法典』第 12 章 125 条（ノートに数字が記載されている）で、「自分の魂の中に至高の魂を認める人は」、「最後にはブラフマンに吸収される」と書かれた箇所から取られている³¹⁾。最後の「Brahma」はボヒンゲルからのノートにあった「普遍的な至高の存在つまり神」と同じであり、バラモン教において人間の最終目標は自分の魂の内に至高の魂を認識して、神（ブラフマン）に吸収されることだと述べているのである。2 番目の B の頁のノートは『インド仏教史序説』で、ブッダの「敵対者」つまりバラモンが「唯一のブラフマンの実体の中に世界と人間を帰そうとしていた」のに対し、「シャカはそれを消滅や空に置き換えた」とブリュヌフが説明しているところである³²⁾。この「消滅や空」は仏教で云われるニルヴァーナであり、最後の C の頁のノートでは「ニルヴァーナ」というテーマのもと、「思考は感覚を伴ってはじめて現れるものであり、感覚がなくなると存続することはない」と「精神は精神自体を把握することができない」という二つの文が記されている³³⁾。ピュルヌフによれば、「二つのテーゼのうち 2 番目は 1 番目の帰結にはかならないが、これらは思考する主体の永続性が信条であるバラモンの考え方とは根本的に対立するものである」という³⁴⁾。バラモン教では主体が消滅することは決してないのに対し、仏教は思考や精神の消滅、つまり考える主体そのものの消滅を目指すのである。

28) N.a.fr. 23668, f° 150 v°.

29) N.a.fr. 23670, f° 7. 引用した箇所には抹消をあらわす [] がついている。

30) N.a.fr. 23670, f° 15. 左端に「ニルヴァーナ」とあるのは、裸形仙人の場面の下書きを始めるとき、読書ノートの項目をテーマ別に分けるために書かれたものだと思う。

31) «Ainsi l'homme qui reconnaît dans sa propre âme, l'Âme suprême présente dans toutes les créatures, se montre le même à l'égard de tous, et obtient le sort le plus heureux, celui d'être à la fin absorbé par Brahma» (*Lois de Manou*, p. 459). 引用の最後の語が『マヌ法典』では「Brahme」となっているのを、フローバールはノートではブリュヌフの表記に合わせて「Brahma」と書いている。

32) «[...] puisqu'il substituait l'anéantissement et le vide au Brahma unique dans la substance duquel ses adversaires faisaient rentrer le monde et l'homme (Burnouf, *op. cit.*, p. 155).

33) 元の『インド仏教史序説』では «Le premier, c'est que la pensée ou l'esprit (car la faculté n'est pas ici distinguée du sujet), ne paraît qu'avec la sensation et ne lui survit pas ; l'autre, que l'esprit ne peut pas se saisir lui-même» (*ibid.*, pp. 561-562).

34) «[...] deux thèses dont la seconde n'est qu'une conséquence de la première, et qui sont radicalement contraires aux opinions des Brâhmanes, pour lesquels la perpétuité du sujet pensant est un article de foi» (*ibid.*, p. 562).

読書ノートを作成した後、フローベールは次のようなプランをつくる。

5°. Mais le soleil brille, devient très ardent. une forêt de l'Inde un gymnosophe, (un bouddha) se brûlant sur un bûcher, sans public. Il explique à St Antoine pourquoi il se brûle, c'est pour s'unir à Dieu. Antoine le regarde se brûler³⁵⁾.

「インドの森」で「裸形仙人³⁶⁾」が「火葬台の上で自ら身を焼く」のは、ボヒンゲルの著作にあるバラモンの焼身自殺と同じだが、2行目の (un bouddha) だけが異質である。フローベールは「神と一体化する」バラモンの中に、不定冠詞つきであるものの「ブッダ」を溶け込ませようとする。

下書き原稿は22頁あるが、本稿ではそれらをたどることはせず、決定稿のみを確認することにする。第4部でアントワヌはローマの牢獄や夜の墓地にいる幻を見た後、インドの森に入り込む。そこには「牛の糞を体になすりつけた、全裸の人間」がいて³⁷⁾、『ナイル河畔のバラモンよ』と語りかける³⁸⁾。「ナイル河畔のバラモン」という表現は目の前にいるアントワヌが自分と同類であること、つまり自分はバラモンであることを示している。男は、自分が森の中でいかに苦行を積み重ねてきたかを語り、厳しい苦行の末に『ようやく至高の魂をあらゆる存在の中に、至高の魂の中にあらゆる存在を把握した』と続ける³⁹⁾。この「至高の魂」とは個々人の魂の深奥にあり、あらゆる存在の魂の深奥と共通するもの（アートマン）である。ここまでは裸形仙人はバラモンの苦行者にはかならないが、終わりに近づくにつれ、様相が変化する。彼は『思考は思考の原因となる一時的な事象がなくなると存続しなくなる。そして精神は他のものと同様に幻覚に過ぎない』と言う⁴⁰⁾。これは仏教における思考や精神の消滅をあらわすものとしてブリュヌフが挙げる二つのテーゼ（注33）と内容的には同一である。仙人は最後に、輪廻転生の旅を捨て、『絶対の最も深いところに、寂滅の中によりやく眠らんとしている』

35) N.a.fr. 23671, f° 93.

36) «gymnosophe」という語はボヒンゲルの著作に見いだされる (Bochinger, *op. cit.*, p. 121 & p. 236)。またストラボン『地誌』にも、裸形仙人が生きたまま自らの身を焼いたという記述がある: «[...] on peut y joindre le gymnosophe Indien qui se brûla vif à Athènes» (Strabon, *Géographie*, Traduite du grec en français par La Porte du Theil, Coray et Letronne, Tome 5, Paris, Imprimerie royale, 1819, p. 5). なお、フローベールが『地誌』の仏語訳を読んだことは、N.a.fr. 23671, f° 145 に «Strabon - traduction Letronne」と記されていることで分かる。

37) «[...] un homme — enduit de bouse de vache, complètement nu» (Flaubert, *La Tentation de saint Antoine*, Édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, Gallimard, «Folio», 1983, p. 130. (以下、「聖アントワヌの誘惑」第3稿の決定稿を引用する際はフォリオ版を用い、T3と略記する。)) 「牛の糞を体になすりつけ」で苦行するバラモンは、ボヒンゲルから取られたノートに記されている: «La pénitence cardagni consiste à se couvrir entièrement de bouse de vache» (Carnet 16 bis, f° 34).

38) «Brachmane des bords du Nil, [...]» (T3, p. 130).

39) «J'ai saisi enfin l'Âme suprême dans tous les êtres, tous les êtres dans l'Âme suprême» (T3, p. 131).

40) «[...] la pensée ne survit pas au fait transitoire qui la cause, et l'esprit n'est qu'une illusion comme le reste» (T3, pp. 131-132).

と告げると⁴¹⁾、炎に包まれる。

裸形仙人が自らの身を焼くという行為、およびその姿（牛の糞を体に塗り付ける等）は完全にバラモンのものである。ボヒンゲルが「仏教では裸の聖者は絶対にありえない」と指摘している通り⁴²⁾、裸の聖者はバラモン教にのみ見られる。仙人はバラモンとして「至高の魂」について語る一方、ブッダとして思考や精神の消滅つまり空について語る。言葉の最後にある「寂滅」*«l'Anéantissement»* は明らかにニルヴァーナのことだが、この語は二通りに解釈できる。ブリュヌフによれば、正統のバラモンはニルヴァーナを「個人の魂の普遍的な神への吸収」とみなす一方、ブッダは「思考原理の完全なる消滅」と考えていたという⁴³⁾。裸形仙人のニルヴァーナはバラモン教のニルヴァーナでもあり、仏教のニルヴァーナでもある。

以上見てきたように、『聖アントワヌの誘惑』第1稿の*«le Religieux»*においても、第3稿の*«le Gymnosophe»*においても、バラモンとブッダが融合している。フローベールは宗教上のアンドロギュノス、両教具有ともいふべき存在を創造したのである。バラモン教と仏教のどちらかに優位を置くといったことはない。若き日のフローベールにとって憧れであり、共感の対象であったバラモンとブッダが『聖アントワヌの誘惑』の中にそのまま生き続けているのであろう。

(大阪大学名誉教授)

41) *«[...] je vais enfin dormir au plus profond de l'absolu, dans l'Anéantissement»* (T3, p. 132).

42) *«Le bouddhisme ne connaît absolument pas de saints nus»* (Bochinger, *op. cit.*, p. 236).

43) *«[...] le Nirvâna pour lui [=Çâkya] ne peut être l'absorption de l'âme individuelle au sein d'un Dieu universel, ainsi que le croyaient les Brâhmanes orthodoxes [...]. [...] Çâkya vit le bien suprême dans l'anéantissement complet du principe pensant»* (Burnouf, *op. cit.*, p. 521).